日本イスパニヤ学会

Asociación Japonesa de Hispanistas

会報第 4 号 / Boletín Núm. 4

2002 年 6 月 30 日 / 30 de junio de 2002

事務局
〒113-8622 東京都文京区本駒込 5-16-9
日本学会事務センター
Tel: 03-5814-5801 Fax: 03-5814-5820

編集局
〒615-8558 京都市右京区西院笠目町 6
京都外国語大学イスパニア語学科(坂東研究室
Tel: 075-322-6121 Fax: 075-322-6246

ホームページ: http://www.nanzan-u.ac.jp/HISPANIA/

創設当時の思い出（下）

原 誠（拓殖大学）

思い出の記の最終回だというのに、今回筆者の筆は大変重かった。というのは 1957 年 3 月 1 日発行の「学会ニュース No. 2」に、1956 年度秋に上智大で開催された第 2 回大会の正確な日付やプログラムが記載されていないからである。ろくろく下準備もしないで思い出の記の執筆を安請け合いした筆者の軽率さを読者諸氏に対して深くお詫びをした上で、乏しい記憶の糸を手繰り、かつ半ば推量によって第 2 回大会の模様を描写することにする。上記「学会ニュース No. 2」には以下のように書かれている。

> “2 時半からの研究発表は各氏とも厖大な準備に対する発表時間の割当が短かったため時間超過もやむを得なかったが、聴衆は最後まで熱心に聴き入った。発表者の顔ぶれは大部分が昨年度と同じで新人が少なかったのはいささか淋しかったが、遠路のため出席できず研究発表論文だけ送られたり、病気のため今年度は発表できなかった方々もあって、来年度の大会が期待される。”

このあと「閉会は予定より 1 時間ほど遅れた」という記述がある。「イスパニカ」第 2 号の掲載論文から推定すると、町田俊昭氏が今回も発表者のトップを切って、「aspecto——本質と応用理論としての形態——」という発表をされたようだ。次いで会田由氏の「スペイン古典劇における体面感情について」、最後に大林多吉氏の「中南米文学展望」というプログラムであったらしい。大島正氏が発表をなさったかどうかについては記憶がない。当時は健康そのものでいらしたから、よもや病欠なさったとは考えたくない。上記引用文中の病欠者がどなただったかは思い出せない。遠路のため出席できなかったのは当時鹿児島商大所属の有富重尋氏であろう。「イスパニカ」第 2 号に同氏の「中世スペイン経済史の一断面」という論文が載っている。閉会が予定より 1 時間延びたのはひとえに大林氏の研究発表と言うよりも講演のせいである。発表時間は当時も今と同じく 20 分間であったが、大林氏は発表者が少ないこ

ともあって、主催校として大会運営の責任上1時間を超えるお話をなさったものと考える。「ニュース」によると、閉会後付近の料理屋に有志が集まって、うなぎ飯をとりながら懇談したとある。これが現在の学会の懇親会の走りと考えられる。

第3回大会は1957年10月12日（土）に大阪外国語大学（上本町8丁目）で開催された。いまそのプログラムをここに転記してみる。

第1部（12時～13時半）

1. 挨拶	会長	永田寛定
2. 事業報告	理事長	笠井鎮夫
3. 決算報告	理事	水谷　清
4. 役員選挙	監事	田中辰之助
5. 予算審議		

第2部（14時～17時）

挨拶

研究発表（ABC順）

再帰動詞の諸用法の検討	東京外国語大学	原　誠
スペイン内乱の特質について	時事通信社	神代　修
Rodericus Didas Castellanusの事蹟	南山大学	町田俊昭
語順に関する若干の研究	東京外国語大学	宮城　昇
「ウワシブンゴ」とその社会的背景	同志社大学	高見英一
冠詞の研究	拓殖大学	瓜谷良平
イスパニヤ語に於ける俗語ラテン語の特徴	大阪外国語大学	吉田秀太郎

懇親会　　うどん料理　美々卯（みみう）

筆者の発表は、再帰動詞seのほとんどの用法を、当時のアメリカ構造言語学者C. C. Friesの提唱するfunction wordと規定したもので、今から振り返るとまさに汗顔の至りである。今回はなんと7名もの研究発表者が揃ったが、筆者を除けば、実に錚々たる顔触れであり、国沢慶一氏の運営の手際良さも手伝って大変な盛会であった。このあと第4回大会が早稲田大、第5回が天理大（筆者が（中）で天理大での大会を第4回と書いたのは誤りであった）というふうに続いていくのだが、第1回、第2回までは言わばヨチヨチ歩きだった学会がこの第3回あたりからしっかりとした足取りで前進を始めたとみてよいであろう。このように学会が確固たる地位を築いた蔭の功労者は何と言っても、瓜谷良平と宮城昇の両氏である。創設当時お二人はそれこそ寝食を忘れて学会の庶務・会計の仕事に取り組んでおられた。のちに庶務を引き継いだ筆者はお二人のレールの上を走っていればよかったのである。お二人はのちに会長も務められたが、これは至極当然のことであった。これらお二人の勲功と、「イスパニカ」という不朽のタイトルを学会誌につけられた編集担当の荒井正道氏の功績とはいくら称えても称えきれないと筆者は思っている。

ここで苦い思い出を二つばかり語ることにしよう。その一は、学会発足当時は、東京外国語学校、同外事専門学校、同大学の出身者・関係者が学会員の中で圧倒的多数を占めていて、神吉敬三氏などは筆者の前でずけずけと、「これではまるで東京外語の同窓会だ」とおっしゃった。当時は事実そうだったから筆者は黙って頭を垂れるしかなかった。しかも「同窓会」という表現の中には「非学問的」というニュアンスも感じ取れたから筆者はなおさら落ち込んでしまった。しかしその後大阪外大、上智大の出身の会員も次第に増加し、また近松洋男氏、秦隆昌氏などが異なった学風を吹き

込んでくださったので、今ではむしろ東京外大出身者の方が小さくなっているように見受けられ、この件はめでたく落着したとみてよいだろう。もう一つは、創立当初は研究発表者が少なく、その対策として質疑応答をやめたらどうかという案が理事会で議されたらしい。以後文書による通達はなかったものの、質疑応答禁止は学会の不文律となっていた。それをいつも平然と破っていたのは関西外大の三品守氏だけであった。しかし学会と名乗っている以上、こういう変則な状態がいつまでも続いていいわけはない。筆者もかつては血の気が多かったから、筆者に劣らず血気盛んな他の連中と語らって 1974 年の駒沢大学における第 18 回大会あたりだったと思うが、いささか強引に質問やコメントが自由にできるようにしてしまった。かくてこれまた一件落着である。

現今では語学と文学と文化の発表がそれぞれ別室で行われる盛況である。また「イスパニカ」への投稿者は引きも切らない。日本国内の学会では満足できず、国際的な学会で堂々と研究発表する人も増えてきた。スペイン語圏の大学でイスパニスモのある分野について講義する人さえ出てきている。他方国内でも、年 1 回の大会では飽き足らないスペイン語学の研究者たちが 1974 年に関西スペイン語学研究会を発足させ、関東地区もこれより 1 年遅れで東京スペイン語学研究会をスタートさせた。1976 年以降両研究会は合同研究会を持つようになり、現今ではこれが SELE と称する「スペイン語学夏期セミナー」に発展している。筆者の個人的なことも述べさせてもらうならば、東京外国語大学で副手→助手→専任講師→助教授→教授と昇任できたのも、同大学定年退職と同時に拓殖大学に言語学の教師として迎えられたのも、これひとえに日本イスパニヤ学会で口頭発表をさせてもらい、それをのちに文章化して「イスパニカ」に掲載させてもらったお蔭であり、学会に足を向けて寝ることは絶対にできない。というわけで筆者は何らかの形で学会に対し恩返しをせねばならないと考えている。他方では筆者は、他の若い研究者に対して及ぼす老害について真剣に考えねばならない年齢に達している。あれこれ勘案した上で、今では筆者の老害を慮ってあと 2 年ぐらいで学会から身を引くのが学会に対する最大の恩返しであるという考えが強くなってきている。

スペイン語を母語とする人々の間には一部ではあるが、ドン・キホーテはスペイン人にしか分からない。スペイン語の文法はスペイン語を母語とする人にしか書けないといった謬見を持っている人がいる。今後は、そういった偏見など意に介さず、日本のイスパニスモを世界のイスパニスモのレヴェルにまで押し上げ、かつそれを凌駕してほしいものだ。

In honorem R. Lapesa

清水 憲男（上智大学）

Rafael Lapesa が 92 歳で逝って 1 年余が経った。Lapesa、否、いつもお呼びしていたように don Rafael には四半世紀以上にわたってお世話になり続け、今も何を書いたらいいのか分からずに茫然としている。私ごときが don Rafael の業績を紹介して讃えるのはおこがましい。*STUDIA HISPANICA IN HONOREM* （Vol. III, Madrid, 1973）や *Homenaje al Profesor Lapesa* （Univ. de Murcia, 1990）に列挙されたもの、それ以降に論考を合本にしたものや歴史アカデミー入会講演（1996）その他が出たり、博士論文が 67 年ぶりに復刊（Univ. de Sevilla, 1998）されたりしている。実質的に don Rafael の単独執筆になる Amado Alonso の発音史 3 巻目や古典語彙論なども今後刊行されよう。

講筵に列した頃には例の西語史もまだ Escelicer 版で、本書を授業で補完していただいたことが古典を読むのにどれだけ役立ったか知れない。（Gredos 版は航空便でお送りくださった。）論文審査を終えても帰国前日まで、私は don Rafael の授業を聴講し続けた。以来私はスペインに出かける度にお宅にお邪魔して、ご指導を仰ぐのを無上の喜びとしてきた。誤植を訂正された論文の抜き刷りも数十点いただいた。夏には別荘にお邪魔して、don Rafael の恩師 Menéndez Pidal や Américo Castro などの思い出話をうかがい、よく近所のレストランでご馳走になった。

一方的に教えていただくばかりの私だったが、2 回だけ don Rafael を驚かせたことがある。初回は名著 *La trayectoria poética de Garcilaso* のパリ刊の海賊版を入手してお渡しした時。二度目は創作の才に欠け、書いたこともないとおっしゃっていた don Rafael が、弱冠 15 歳で Nebrija を讃える Loa を書いておいでだったのを Méndez Bejarano 編の論集 （Madrid, 1922）に見つけてお知らせした時だ。まったく記憶から消えていたとのことだった。

90 年代半ばに入ると体力の衰えが著しかった。それでも私の C.S.I.C.での講演には二度とも足を運んでくださった。96 年の二度目の時には杖をついても数段の階段が大変だった。don Rafael が見えたとの知らせで私は玄関に駆けつけ、「don Rafael、こんな所においでになっては駄目じゃないですか」と真剣に「抗議」をした。微笑みながら「最前列に連れて行ってください」とおっしゃる don Rafael の脇を抱えて、ゆっくりゆっくりご案内した。あの時に抱いた「申し訳ありません」の気持ちが、つい昨日のことのように蘇ってくる。

最後にお目にかかった頃には、かなり意識が薄れていた。長椅子にゆったり座って毛布を掛けた don Rafael は私を確認するや、懸命に話そうとされた。三つ文をおっしゃったが、三つ目はもう言葉としては発音されなかった。私は涙を見せてはなるまいと懸命に作り笑いをして、「don Rafael、お元気じゃありませんか。また来ますから大事になさってください」と申し上げるのがやっとだった。

Don Rafael、ゆっくりお休みください。ほんとうにありがとうございました。そして、申し訳ありません。

Camilo José Cela in memoriam

有本　紀明（中京大学）

この3月マドリードを訪れる機会があった。例のごとくエスパサ・カルペ書店を覗いてみる。入口近くにセラのコーナーが設けられていた。ひとりの作家にこれほどのスペースが割かれるのはまれなことだろう。体裁や装丁を一新した本の群れに心が騒ぐ。

セラが死去した。享年85歳であった。優に半世紀以上にわたって文壇の主要な席を占め、同時に文学的現実でありづつけた。今の時代を生きる大多数のスペイン人にとって、セラは教科書に出てくる“古典”作家である。神話化される一方で、しばしば論議の対象になり、時にはスキャンダラスな話題すら提供した。セラの弔問に国王をはじめ、首相、閣僚、各界の著名人がかけつける。人々は改めてその存在の大きさに気付いた感がある。

セラのような人にそう会えるわけがない。しかし私たちはその作品を通して著者に近づける。最初の接触はラジオ講座のテキストに使った『ラ・アルカリアへの旅』を通じてであった。後、訳出に際して実際にアルカリア地方を「旅人」と同じように歩いてみた。これは面白い経験であった。そういえば、『パスクワル・ドゥアルテの家族』のときも、エストレマドゥラを回りながら、はたと、これぞ作品の舞台だと、独り合点したものだ。ガリシア地方特有の雨「オルバーリャ」を体験したとして、それが『二人の死者のためのマズルカ』の理解にいかほどの益になるか疑問だが、ある種の確信のようなものが生まれる。いつしか、作者のリズムをつかんだような気になるのが不思議であった。

セラの本質は詩人のそれだ。ゴンゴラに捧げられた詩集があるからというのではない。どの散文作品でもよい。内的あるいは外的な風景描写に見られる情緒性、抒情性は特徴的だ。セラの作品に凄絶な描写は事欠かない。暴力的で野蛮な人物も現れる。しかし醜なるものがしばしば美になり、悪は悪に徹しきれない。その意味で悪も悪人もない。世の事柄、「涙の谷間」に生きる人間に対する共感ないしは哀歓がなせるわざであろうか。作者の微妙な筆の運びがそこはかとない余韻を醸し出す。

机を整理していると、それでも何通かのセラからの手紙があった。特別に頂いた名刺に混じって、セラが戦時中提出した（おそらくスペインでも知られていないだろう）請願書まで出てきた。これは、ログローニョの軍関係の仕事に携わっていた私の岳父が偶然保管していたのだが、自らの保身をもくろんだ転出願いであった。

確かに矛盾のひとであった。いや、ひいでて人間的であったというべきだろう。先年の東京での文化フォーラムはじめ、個人的に接触する機会も何度かあったが、われわれには実に気さくで、細やかであった。溢れるような好奇心は特に印象的だ。

文学的教養を含め、戦後スペイン文壇で彼ほどスペイン的で、また彼ほどスペインを愛し、スペインを知り、その本質を追求した作家はいない。セラ亡き後の空隙を埋めるのは容易なことではあるまい。セラに反旗を翻す人は少なくない、しかし彼がセルバンテス以来のカスティーリャ語の創造者の正当な系譜にあり、現代スペインの最大のことばの使い手であるということに異を唱える者はいない。

セラは今、世間のかしましい論争をよそに、終生愛して止まなかった故郷ガリシアの「あまりにも美しく、きわめて文学的な」地イリア・フラビアで永遠の眠りについている。

【国際会議報告】

第2回国際スペイン語学会
Segundo Congreso Internacional de la Lengua Española, Valladolid

上田 博人（東京大学）

昨年(2001年)の10月16日から19日までValladolid市でRAE: Real Academia Españolaと「セルバンテス協会」（Instituto Cervantes）が共催した国際会議に出席する機会があったので簡単に報告したい。

《El español en la sociedad de la información》という統一テーマを見ると、情報化された国際社会で奮闘するスペイン語にかけられた熱い期待が感じられる。事実、あの9月11日に始まった惨事と恐怖にもかかわらず、世界中から300人以上の文学者・スペイン語研究者・政府関係者・報道関係者がCastillaの地方都市に参集した。スペイン国王による開会宣言の後、平行する多くのセッションで簡潔な報告と活発な議論が忙しく進行した。その4日間は連日テレビ・ラジオ・新聞で国際社会におけるスペイン語の姿についての議論が報道され、特集が組まれた。

会場では、La industria del español como lengua extranjera, La edición en español, La difusión de la música en español, La radio en español, La televisión en español, La universidad e internet, La norma hispánica, El español de América, El español en los Estados Unidos de América, El español en contacto con otras lenguas, ... など興味深いテーマの口頭発表が続き、同時にロビーでRAEや「セルバンテス協会」などのパネル展示とプレゼンテーションがあった。目が回るほどの量と質の情報が参加者を圧倒し、私は再会した知人・友人たちと旧交を温めるなどという余裕はほとんどなかった。

20年以上も前のことになるがComplutense大学の指導教授にRetiro公園とEl Prado美術館に挟まれた閑静なFelipe IV通りにあるRAEの中を見せていただいたことがある。そのとき*Diccionario de la Lengua Española*（最新刊は2001年の22版）を支える膨大な語彙の資料の前で緊張し立ちすくむ思いがした。それが今回のValladolidでは若いIT技術者の説明によってRAEのチームワークによる辞書編集の新体制を知り、まさに隔世の感に打たれた。

国際化、情報化、グロバリゼーションなどという巨大な一方向の力は特定の国際語のモノカルチャーを促進する。世界中の人々が外国語として唯一英語を学ぶ様子など想像するだけで気味が悪い。これは個人的な感情の問題だけではない。さらに恐ろしいことに本来多様で豊かな地球上の文化が均質化し、最終的に失われてしまうという取り返しのつかない重大な結果を招くのである。そのアンバランスを矯正する有力な対抗勢力の一つが広域スペイン語である。幸い日本では個人の利益や経済的な効果だけでなく、文化的な魅力に惹かれてスペイン語を学ぶ人々が増加しているようだ。この会議はスペイン語を含む外国語教育の多様化の意義を国際的な環境の中で考えてみる良い機会であった。

（＊会議の口頭発表は「セルバンテス協会」のHPにアップロードされている。
http://congresodelalengua.cervantes.es/ ）

【国際会議報告】

第5回一般言語学学会
V Congreso de Lingüística General

橋本 和美（京都外国語大学）

スペインのレオン大学哲文学部で2002年3月5日～8日の4日間、第5回一般言語学学会（V Congreso de Lingüística General）が開催された。2年に一度開かれるこの学会は1994年バレンシアから始まり、96年グラナダ、98年サラマンカ、2000年カディスと回を重ね、今年に至る。会場にはスペインを中心とした世界各国の大学（アメリカ合衆国、アルゼンチン、イギリス、ウルグアイ、カナダ、ブラジル、フランス、ベネズエラ、ポーランド）やスペインの大手企業の研究機関（Fundación Telefónica, Planeta Actimedia）などから多数の研究者が集った。

研究発表は計270余り。音韻論・形態論・統語論・意味論・語彙論・語用論・歴史言語学・談話分析・対照言語学・社会言語学・心理言語学・応用言語学・教授法・コンピューター言語学の部門に分かれた。その一部を挙げる。統語論では、Gutiérrez Ordóñez, Kovacci らの先行研究をベースに〈副詞 *-mente*〉の機能と用法が再検討された（Iglesias Bango）。また社会言語・語用論では、外国人学習者がより実用的なスペイン語を習得するために、従来のテキストの組み替えが試みられた（Santiago Guervós）。他にも、接続法の時制と否定文（González Rodríguez）、位置格 ser・estar（Salazar García）、辞書と電子コーパスとの相違（López Meirama）、カタルーニャ語自著をカスティーリャ語に翻訳する作家 Antoni Marí の言語（Poch Olivé）、インターネット（Galindo 他）や携帯電話メール（Galán Rodríguez）の変則的なことば、移民のスペイン語（Fuentes González）など、伝統的なものから近年ならではのテーマまで多岐にわたった。また、非ネイティブの研究成果や外国語も少なからず取り上げられたことを指摘しておきたい。例えば、フランス語（Duée 他）、ドイツ語（Grümpel 他）、英語（Lareo Martín 他）とスペイン語との対照研究。ロシア語を学ぶスペイン人のエラーアナリシス（Belda Torrijos）、西伊翻訳における *de hecho, en efecto, efectivamente* の取り扱い（Flores Acuña）などがあった。

特別講演は6つ用意され、毎日午前・午後の研究発表後に行われた。テーマは言語習得（Fernández Pérez）、地方言語の保護（Argenter Giralt）や古文書学と通時論（Moreno Cabrera）など。文の構造（Val Álvaro）がテーマの講演では、一例として日本語が統語的に分析された。

2日目の円卓討論会は、とりわけ注目を集めた。Brucart Marraco（バルセロナ自治大学）、Gutiérrez Ordóñez（レオン大学）、Rodríguez Espiñeira（サンティアゴ・デ・コンポステーラ大学）、Santos Río（サラマンカ大学）らが一堂に会し、統語論の現状について意見を交換した。スペイン語学の第一線で活躍する研究者らの活発な討論は、会場に詰め掛けた300人を超す参加者に大きな刺激を与えた。

その他、パネルも設けられ、スペイン国内の大学（アルメリア、サンティアゴ・デ・コンポステーラ、バスク、バレンシア、マドリード自治、レオン）の研究プロジェクトや学術雑誌が紹介された。最新の研究動向をリアルタイムに把握できる貴重な場であった。

このような盛りだくさんの内容に、会場内は連日夕刻を過ぎても活気が続いた。短

い休憩時間に、バルで一息入れながら意見を交換する人々の光景も印象に残る。スペイン語学研究の多様性と共に、スペイン語圏の研究者と外国人研究者との連帯による、科学的かつ客観的な研究の重要性を実感した学会であった。
http://www3.unileon.es/dp/dfh/LG/index.html

2002年度第1回理事会

2002年度理事会は下記の要領で開催されました。

日時：5月26日　13：00～15：30
場所：モンブランホテル（名古屋駅前）

3月の選挙で理事長に木下登が、新理事に木村琢也、斎藤文子、角田哲康、堀田英夫が選出された。現行理事は計18名。

1. 前回議事録（2001. 10. 27）を承認。
2. 審議事項
   (1) 庶務に浅若みどり、会計に角田哲康、広報委員ＨＰ担当に堀田英夫がそれぞれ選出された。
   (2) 『HISPÁNICA』の編集委員を以下の通り選出した。
   語学：ルイス・ティノコ、木村琢也／文学：野谷文昭、斎藤文子、佐竹謙一／美術：木下亮／思想：木下登。編集長は野谷に決定。
   (3) 入会申請9件を審議、承認（別記参照）。
   (4) 2002年度第48回大会の進捗状況について。
   (5) 『HISPÁNICA』について、査読の際に応募者の専門分野を予め明確にしておく必要があるとの議論があり、名簿改訂時に検討するべきとされた。また、バックナンバーの処理について、大会で配布するなどの案が出された。
   (6) 2003年度大会の会場として立命館大学草津キャンパスが承認された。

ホセ・マリア・ディエス・ボルケ博士（マドリード・コンプルテンセ大学教授）
連続講演会『スペイン黄金世紀の文学と社会』全12回　開催のお知らせ

昨年度は上記講演会の2度にわたる中止により大変ご迷惑をおかけいたしましたが、年度をあらためまして下記日程にて実施の運びとなりました。

2002年9月30日（月）～10月12日（土）日曜日を除く

講演プログラムは昨年度お知らせしたものと同一です。ご参加の申し込み、およびお問い合わせは、下記までお寄せください。

〒141-8642
東京都品川区東五反田3丁目16番21号
清泉女子大学スペイン語スペイン文学科研究室
Tel・Fax　03-5421-3270

＜プラド美術館展＞を訪れて

浅若　みどり（南山大学）

本年3月5日から6月16日まで、東京国立西洋美術館にて「プラド美術館展」が開催された。47作家の77点に上る作品が集められ、日本ではこの規模のプラド展は初めてのことである。膨大な作品数を誇る美術館展は、日本で行われると節操のない展示になりがちだが、本展覧会はマドリードから少しずつそっと切り取っては丁寧に並べた縮図のような感があった。

プラドの所蔵品は19世紀以前に王室が集めたコレクションを母体としているため、元々統一が取れているが、端的に言えば地味である。ポスターなどに登場していたベラスケスの＜セバスティアン・デ・モーラ＞やムリーリョの＜無原罪の御宿り＞は無論よく知られた傑作だが、特に門外不出級の有名作品が来た訳でもない。しかし、代表的な画家をカバーし、しかもそれぞれの特質の出た作品がきちんと集められていた。そのためか、美術館の入り口は長蛇の列だった。

辛抱強く並んで最初に現れたのは、レオーネによるカール5世のブロンズ胸像である。この最初の一角には、ベラスケスの＜フェリペ4世＞はじめ、ハプスブルグの宮廷人がずらりと並んでいた。次の空間にはティツィアーノやルーベンスなど王室好みの華やかなイタリアとフランドルの絵画が続き、通路を経てグレコ、スルバラン、リベーラらの荘厳なカトリック世界が展開する。マドリードの展示よりも照明が控えてあるせいか、リベーラの聖人は息を飲む迫力だった。偶然かと思うが、ムリーリョの＜善き羊飼い＞はマリア像よりも注目を集めていた。ムリーリョの描く子どもの愛らしさは、マリアにみられる甘さよりも受け入れやすいのかもしれない。このあとベラスケスの一般肖像画、バン・デル・アメンらのボデゴンといったスペイン・リアリズムの極致が続く。エスピノーサの＜林檎、すもも、葡萄、梨のある静物＞を誰かが「おいしそう」と素直に評するのが聞こえて、興味深かった。展示作品が本来王宮のどこに展示されていたかも含め、作品の背景も詳しく説明されていたが、失礼ながら周りの人の、特に解説を読む前の話を立ち聞きするのも面白かった。日本人の大半はカトリックとも王室の威厳とも直接関わりがないので、本来の意図に関心がなければ、作品はあくまできれいかどうかの存在なのである。

最後にブルボン宮廷画家の作品群に至ると、急に色彩が華やかになった。ゴヤの＜日傘＞＜巨人＞＜自画像＞＜ボルドーのミルク売り娘＞が並んだ前で、これも誰かが「同じ人が描いたなんて思えない」と言っており、改めてゴヤの生涯の濃さを思った。展示はフォルトゥーニ、ソローリャらの爽やかな陽光で締めくくられる。これなら重苦しい気分で会場を後にした人は少ないだろう。

名品を単に紹介するのではなく、宮廷社会の芸術的至宝であるプラドという宇宙を凝縮して見せた、文字通りの「プラド美術館展」であった。

【新刊紹介】（自著を語る）

芝　紘子著『スペインの社会・家族・心性 —中世盛期に源をもとめて』（ミネルヴァ書房 2001年）の出版をめぐって

近代ヨーロッパの社会・人間関係・心性は中世盛期に遡る。ユーロ導入に象徴されるひとつのヨーロッパの背後にある多様な現代ヨーロッパを理解するうえでも、その分岐点となった中世盛期の社会の動向をそれぞれの地域について見ることは興味深いであろう。この点をスペインについて探究したのが本著である。

中世イベリア半島は、キリスト教圏とイスラーム圏の境界線がその内部に位置したがゆえに大変動を経験し、特異な歴史を紡いでいた。当時の社会のなかに、その後のスペイン社会を直接・間接に左右する特質が存在していたはずである。連続する事象を時系列で捉える通史からは見えにくい、そうした社会の根本的な特質とは何か、さまざまな事象の深層に横たわる基層とはどのようなものか。ミクロの史料分析とマクロの視点から事象の連関を探る歴史人類学（人類学的歴史）の方法論により、近世・近代スペインの母胎となるカスティーリャ王国の社会・家族・心性にかかわる諸事象を考察した。ことに、心性についてはこうした学際的方法論が有効である。北西ヨーロッパや同じ半島内のカタルーニャ地方との比較、さらには環地中海諸地域との比較は、カスティーリャ社会の特質をより鮮明に浮かび上がらせる。

本著は、これまでに時折発表してきたいくつかの論文を加筆・訂正し、また、いくぶんかを新たに書き加えたものである。結果からすれば、うえに抽象的に紹介したようなことになるが、その基となったひとつひとつの論文は、きわめて単純な疑問から発している。なぜ近世スペインでは人口の1割もが「貴族」なのか、なぜ伝統的に貴族志向が強かったのか、なぜ異教徒同士が「共存」しえたのか、ほかの西欧がユダヤ人を早々と追放したのに、なぜ15世紀末だったのか、スペイン人のややこしい名前はどこから来たのか、「名誉」の報復殺人がなぜ認められてきたのか、名誉観念はなぜ地中海地域に共通するのか、など。興味の赴くまま、社会や政治、家族や人間関係、意識や心性、とさまざまにテーマを変えていったが、そのうち、研究対象とする事象が異なっても、かならず行き当たるものがあることに気付いた。いわば、「金太郎アメ」（若い世代の方々はご存知ない？）みたいなものである。どういう切り口であろうと、角度によっては歪むが、つねに「金太郎」が見えてくる。その「顔」こそ、カスティーリャ社会の基層に違いない。そう確信するようになった。趣味として研究してきたことをひとまずこのような形にすることができたが、反省点もあり、今後の研究に生かしていきたいと思っている。

（芝　紘子・非会員）

【新刊紹介】

神代　修著『シモン・ボリーバル －ラテンアメリカ独立の父』（行路社 2001年 216 pp.）

本書は、日本人研究者によって初めて日本語で書き下ろされたボリーバルの評伝である。長らくホセ・ルイス・サルセド＝バスタルド著『シモン・ボリーバル －ラテンアメリカ解放者の人と思想－』（水野一監訳 春秋社 1986年）が唯一の日本語で読めるボリーバル研究書であったことを考えると、本書が出版された意義は大きい。

著者はボリーバルが持つ軍人・政治家・思想家という三つの顔を浮き彫りにしながら、ラテンアメリカ解放者のダイナミックな一生を描き出した。本書は全11章で構成される。第1章「マントゥアーノ」ではボリーバルの家系と生い立ち、そして解放者としての資質がいかに育まれたかについて言及され、第2章「旅立ち」では彼がラテンアメリカ独立を決意したヨーロッパの旅が語られる。第3章「独立の道」及び第4章「独立革命の開始」ではもう一人の独立運動の先駆者ミランダとボリーバルの関係が明らかにされ、興味深い。続く第5章「祖国への帰還」そして第6章「カリブ海の島々」では、ボリーバルの声明の中でも最も重要とされる政治文書「カルタヘーナ宣言」及び「ジャマイカ書簡」を通じて彼の思想に迫り、その独立の構想の基盤となった独自の歴史観はもちろんのこと、彼がヨーロッパから吸収し、ラテンアメリカの事情に則して発展させた自由主義や民主主義の考えを明らかにしている。そして第7章「勝利への前進」、第8章「ティエッラ・フィルメの解放」、第9章「南へ向かって」、第10章「悲願成就」と一気に解放達成までを綴る。行軍の過酷さに加え、刻々と変化する政治状況をも追い、軍人ボリーバルのみならず政治家としてのその資質をも評価している。最終章「迷走の将軍」では自らの終焉の場を求めて彷徨う人間ボリーバルにも眼差しを向けている。

ボリーバルの思想を日本語に要約することは容易ではないと思われるが、著者はボリーバルが発表した重要な演説・宣言・書簡などの要諦を的確に抽出し、明解で平易な文体で紹介し、分析を加えている。学生をはじめとする一般読者にも読みやすい。まさに「物語ラテンアメリカ独立史」である。

本文中では、注記を付す代わりに、引用文献の出典が可能な限り明記され、用語の説明も簡潔である。著者から読者への細やかな配慮であろう。参考文献はボリーバルについて、南米の解放者たちについて、ベネズエラの歴史、ラテンアメリカ独立史というようにテーマ別に分類されている。資料として、ボリーバルが指揮した独立運動の推移を示す地図が4枚（「ティエッラ・フィルメの戦い」「南方作戦（1）」「南方作戦（2）」「ボリーバルの最後の日々」）付録されているほか、詳細な日付を付した略年譜も収められ、そこにはアンデスの過酷な自然条件や混乱した政治の駆け引きをものともしないボリーバルの信念と行動力が見て取れる。また、南米の風景写真、戦闘の様子を描いた挿し絵、ボリーバルを巡る人々の肖像画もふんだんに掲載され、読者は具体的なイメージをふくらませて読み進めることができる。肖像画などの出典が示されていれば尚よかったと思われる。

著者はキューバ解放の父ホセ・マルティとその独立戦争を研究対象としている。そのマルティがボリーバルを崇拝し、論究していることから（本書にもマルティのボリーバル論が掲載されている）、ボリーバルについてここ十年来、本格的に研究を継続してきたそうだ。折しも来年はマルティ生誕150年にあたる。著者による長年に亘る研究成果の発表が待望される。

（京都外国語大学・立岩　礼子）

【事務局から】《会員の異動》

新入会員

1．磯山　久美子（お茶の水女子大学大学院人間文化研究科）
研究テーマ：1920 年代スペインの女性の問題。具体的には女性の断髪について
[redacted]

2．片山　るい
[redacted]

3．佐藤　好正（佐藤工房）
研究テーマ：スペイン語の歴史音韻論
[redacted]

4．丹波　美佐子（東海大学湘南校舎外国語センター）
研究テーマ：1. スペイン語と日本語の比較文法：スペイン語の再帰動詞に用いられる se と日本語の自動詞の比較研究　2. メキシコ（メソアメリカ）における少数民族の言語：類型論的アプローチ
[redacted]

5．時任　まり子（鹿児島国際大学）
[redacted]

6．富田　広樹（大阪外国語大学）
研究テーマ：José Cadalso と 18 世紀スペイン文学
[redacted]

7．長谷川　哲子（立命館大学理工学部）
研究テーマ：留学生対象の日本語教育。日本語教育に資する日西対照、日本語習得における母語の役割について
[redacted]

8．三倉　康博（東京大学大学院総合文化研究科地球文化研究専攻）
研究テーマ：スペイン黄金世紀文学（特にミゲル・デ・セルバンテスのイスラーム世界に関する認識）
[redacted]

9．宮島　敦子（明治学院大学）
研究テーマ：スペイン語・日本語対照言語学（感情主語の規定する構文、主題の表し方など）
[redacted]

退会者

岡田　辰雄、佐々木　孝、佐藤　玖美子、Clementina M. Giménez、Carmen Gil、三原　幸久